事例紹介

新学力観入試の実現をめざして

―筑波大学アドミッションセンターこの一年―

筑波大学文芸・言語学系講師／アドミッションセンター　島田康行

1．ACの設立，AC入試の導入

1．1　機運

本学には，入試の制度・方法など入学者選抜の全体に検討を加える常設の組織として教育計画室があり，長くこれを担当してきた。ただし，大きな変更を必要とする時には，臨時の専門委員会を設置することになっていた。

最近では平成6年，「入学者選抜方法改善のための専門委員会」が，教育計画室のもとに設置された。個別学力試験が，分離・分割方式への統一，6教科31科目に増えた高校教育課程などへの対応を迫られた時期であった。

その専門委員会がまとめた報告書（平成8年）に曰く，「入試は大学にとって最重要な業務の一つであり，将来，入試の基本的方向と実務を体系的に統合できる委員会，また入試の実務を専門に担当する，アドミッションズ・オフィスのような組織を検討していくことも必要である。」

教育計画室から入試部門の独立をうながすものであった。

大学に携わる人々の関心が今日ほど入試に向けられている時代は，かつてなかったに違いない。が，本学は開学当初から推薦入学制度を取り入れ，昭和53年度からは第2学期推薦入学を導入するなど，早くから入学者選抜の改善に取り組んできた。入試をめぐる状況への関心が常に高く持たれ，具体的な提言もまた，なされていた。

したがって，のちに中央教育審議会が，その第二次答申（平成9年）で選抜方法の多様化や評価尺度の多元化など，入学者選抜の改善を進めるための条件として「アドミッション・オフィスの整備」に言及したときも，その趣旨はすでに考慮され念頭に置かれた，いくつかの方策の一つとして了解される状況にあったと言える。

この答申がアドミッションセンター（以下AC）設立の直接の契機となったことは疑いない。ただ，そのときすでに，機運は熟していたのである。

平成11年4月，ACは，AC入試の実施，入学者選抜方法の改善に関する

検討，入学者の追跡調査に関する業務を行う機関として活動を開始した。

1．2　背景

第２学期推薦入学や専門高校・総合学科卒業生選抜など，すでに多様な入学者選抜を行ってきた本学では，入学経路による学生の個性の差や「成績」の傾向に自ずと注目が集まる。そしてそれぞれの教育組織が，それぞれの入試に対して異なる印象を持っている。

推薦入学を例に述べる。

入学後の学業成績で見る限り，全学の推薦入学者の約半分は実に優秀な成績を修めている。卒業・進学後，すばらしい業績を上げる者も少なくない。推薦入学者が核的存在となっている教育組織もあり，開学以来，この制度が存続してきた所以でもある。

学業成績，と言った。

本学で言うところのそれは，大雑把に言えばＡ評価の取得率である。推薦入学者の多くは，高等学校の「成績概評Ａ段階に属する者」であって，みな優秀な「学業成績」を修める術をよく心得ている，はずである。

それが，

①どうもそうとは限らないようだ，という例が間々ある。

②学生に求めたい資質や能力と，必ずしも一致しない例が増えている。

①については，高等学校と充分な連携を図ることで，改善されるのかもしれない。

問題はむしろ②である。問題解決型の人材育成を教育目標に掲げ，研究重視の大学であることを目指す本学にとって，自ら課題を発見し，解決する能力に長けた人材の確保は必須である。高等学校までの学習成績が，必ずしも問題解決能力を保証するものではないとすれば，そのような人材を確保するための，何らかの手立てを講ずる必要がある。教育組織によっては，②の問題が，上の仮定をあながち杞憂とは言いきれないほどの，切実さをともなうものとなっていた。

また同じように，第２学期推薦入学や個別入試（後期）入学の学生を高く評価する教育組織がある一方で，それらの入試に種々の問題を認める教育組織もある。

いずれの入試にも長所と短所があるという認識が浸透し，また，従来の入試では測り得ない能力－自ら課題を発見し，解決する能力－の不足が，一部では問題視されていた。

AC 入試導入の背景には，入試をめぐるこのような状況があった。

1．3　反応

一方で，従来型の学力試験を課さない，学校長の推薦を必要としない，調査書の出願要件も設けない，そんな入試で志願者の「学力」を測れるのか，という疑念の声ももちろんあった。また，従来の入試で，求める学生は充分に選抜できている，という見解もあった。

AC 入試を導入しようという呼びかけに対する教育組織の反応は，まちまちになった。推薦入試の定員をすべて AC 入試に回したい，という組織もあれば，参加を留保する組織もある。

もとより，AC 入試を含めて，それぞれの入試に対する考え方は，教育組織によって一様ではない。その考え方の差は，教育組織が設定する各入試の募集定員に反映される。［表１］に過去３年間における各試験の募集定員の推移を示しておく。

過去に例のない方式の入試が，初めから全教員の信頼を得られるはずはない。その意味で，AC 入試が入学者選抜の方法として有効な一つの手段であることを全学に知ってもらうことは何よりも重要であり，AC は機会あるごとにその説明に努めている。実際に選考を担当した教員が，学内に対する AC 入試の説明に一役かってくれる場合も多い。

今年度は第二学群がそろって参加するなど実施組織が倍増した。また募集定員を増やした組織もある。初年度の実施を通じて，AC 入試の有効性が認められつつあるのだろう。小さな，しかし確実な一歩を重ねるしかない。

昨年度，センター試験を課した二つの学類は，倍率が上がらず苦しい選抜を余儀なくされた。両学類とも今年度はセンター試験を課していない。今年度は，初めて参加する一つの学類がセンター試験を課す。一歩一歩である。

こうして本学への入学経路は，推薦入試，個別試験（前・後期），AC 入試

［表1］

学類・専門学群	入学定員			個別（前期）			個別（後期）			推薦入学			AC入試	
／年度	H11	H12	H13	H11	H12	H13	H11	H12	H13	H11	H12	H13	H12	H13
人文	120	120	120	70	70	70	20	20	17	30	30	30	0	3
社会	100	80	80	56	45	48	24	19	16	20	16	16	0	0
自然	200	200	200	120	117	117	30	28	28	50	50	50	5	5
比較文化	80	80	80	40	40	40	16	16	12	24	24	24	0	4
日本語・日本文化	60	40	40	32	20	20	13	8	8	15	12	10	0	2
人間	120	120	120	75	75	75	15	15	15	30	30	25	0	5
生物	80	80	80	45	45	44	19	19	18	16	16	15	0	3
生物資源	140	120	120	74	60	63	31	25	20	35	35	33	0	4
社会工	120	120	120	70	70	70	30	29	25	20	20	20	1	5
国際総合	90	80	80	40	32	32	25	16	16	25	24	24	8	8
情報	100	80	80	60	48	48	20	12	12	20	16	16	4	4
工学システム	140	130	130	75	70	70	35	30	30	30	10	10	20	20
工学基礎	130	120	120	78	71	71	33	30	30	19	12	13	7	6
医学	100	95	95	60	55	55	15	10	10	25	30	30	0	0
体育	240	240	240	143	137	128	25	23	20	72	72	84	8	8
芸術	100	100	100	60	60	55	10	10	10	30	30	30	0	5
合計	1920	1805	1805	1098	1015	1006	361	310	287	461	427	430	53	82

の４つに増え，入学する学生のいっそうの多様化が図られている。今後，各教育組織にとっては，入試ごとの定員比率の最適化が課題の一つになるだろう。その最適化のために有用なデータを提供することもACの果たすべき役割となるはずである。

１．４　組織

現在のACは，センター長，４名の専任教員，３名の事務職員によって構成されている。

事務職員は本学の教務・入試事務に精通しており，入試係・教育公開係・調査記録係とともに学務第二課に所属する。

一方，現在の専任教員は，機能工学系，数学系，臨床医学系，文芸・言語学系の所属である。この中には教科教育の分野で初等・中等教育に関わった経歴を持つ者もあるが，高等教育や入学者選抜などを専門分野とする者はいない。

専任教員は，入試制度や方法に関する研究，入試制度の評価，入学者の追跡調査に関する研究に従事すること，と規定されている。これらの研究と，AC入試の企画及び実施，そしてさまざまな広報活動，が専任教員の主たる仕事の内容である。授業は担当しないが，春から秋にかけて各地で行われる進学ガイダンスに参加し，多くの受験生や高等学校教員と，直接話す機会を得ている。高校が夏休みに入ると，ACの狭いスペースは，全国から受験相談に訪れる高校生でにぎやかになる。

なお，ACの業務全般について協議する組織として，AC運営委員会がある。センター長を委員長として，各学群から選出された委員等により構成されている。

２．AC入試

２．１　実施

この入試は，新学習指導要領の示す新しい「学力」－自ら学び，自ら考える力－の考え方に基づき，その「学力」を多面的に評価しようとする，自己提案型の入試である。志願者の問題解決能力が最も重要な評価の観点となる。

志願者は，明確かつ具体的な目的意識を持ち，大学での勉学に対する適応性を自ら提案することを求められる。そして，大学入学資格を持つ人なら誰でも出願できる。

同じ平成12年度入試から導入された東北大学，九州大学のAO（方式）入試と本学AC入試とは，選抜方法はもとより，ACの関与の仕方に大きな違いがある。

私学を含めて，多くのAO（方式）入試の選考は，旧来どおり学部主導で行われるのが主流だろう。

しかし，本学のAC入試はACが「実施」をも担当する。AC教員はAC入試の企画・準備にとどまらず，選考にも責任を負う。全ての志願者について書類選考と面接を行い，教育組織と連携を図りつつ選考に当たる。13年度もこの原則に変わりはない。

さらに，本学のAC入試は，各教育組織の入学試験の一部を肩代りするものではない。各教育組織の入学定員の一部を預かり，各組織の教育目標を念頭に置きつつ全学的な視点から選抜を行う。企画から選考までAC主導であり，そのような役割を果たす機関としてACは設置されているのである。

２．２　選考

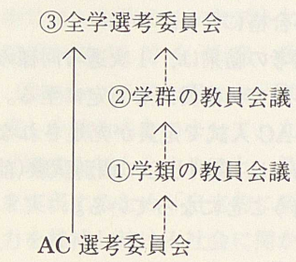
AC入試の選考は，AC専任教員のほか，学長指名による数名のAC専門委員（任期２年）と，各教育組織からの申し出によって選考に加わる教員の協力を得て行われる。

１次選考では志願者１人の書類を，専任教員と，専門委員または申し出による教員，あわせて３人以上で採点する。このとき，多面的な評価を行うため，志願先の教育組織とは専門分野の異なるメンバーを敢えて含めておく。教育組織からの申し出がなければ，その教育組織とはほとんど関連のない専門分野の教員のみによって選考が行われることもあり得る。実際そうした例はすでにある。

合否の判定はまず，センター長を委員長とするAC選考委員会（第１次）によって行われる。専任教員，専門委員と教育組織からの申し出による教員を構成員とし，教育組織の意向を反映させて判定する。

AC入試の選考体制の特徴は，この選考委員会の議決を以って，教育組織の教員会議の議を経たものとすることができる，と規定している点である。

個別入試や推薦入学の合否判定は，①学類の教員会議→②学群の教員会議→③全学の選考委員会という手順を踏むが，AC入試では，AC選考委員会から直接③へ上げることが可能になっている。（下図参照）



ただし，教育組織がAC選考委員会の議決を，教員会議の「議を経たもの」と認めない場合もあり得る。（毎年，照会・確認される。）その場合はAC選考委員会の後，①→②→③と進むのである。

２次選考の面接は，基本的に１次選考に当たったメンバーが引き続きこれに当たる。この段階で教育組織からの

申し出による教員が加わる場合もある。書類選考を担当しなかった教員が面接に加わる場合は，必ず事前に書類を精読してからこれに臨むことになる。面接では志願者の提出した書類が全て本人の手に拠るものかどうか，その同一性の確認が大きなウェイトを占めるからである。

この面接の結果を１次の書類選考の結果と併せて総合的に判断し，合否の判定を行う。「総合的」とは書類の得点と面接の得点との加算を意味するものではない。よって，書類選考の結果が高得点でも，面接で同一性や適応性に致命的な問題が認められた志願者は，確実に不合格になる。

２次選考の結果は，１次選考同様の手続きを経て，最終的な判定に至る。

なお，AC 入試で定員が充足されなかった場合は，原則として個別試験（前期）で補うことになっている。

３．第Ⅱ期入試を終えて

［表２］に平成12年度 AC 入試（Ⅰ・Ⅱ期）の実施状況を示す。

第Ⅱ期（８月入学）入試は，高校既卒者と大学入学資格を持つ社会人を対象とする入試である。

いわゆる現役（その年の４月～７月卒業）の帰国子女対象には「帰国子女特別選抜（第２学期推薦入学）」という別の入試が従来どおり実施されている。

今年度第Ⅱ期入試の志願者は，春に本学を受験した者が再挑戦して来たケースが多く，実のところこちらの思惑はやや外れた。一方，40年にわたって社会に貢献して来た実績の持ち主を迎えることになった。社会人の合格者は初めてである。

AC 入試実施初年度から，求める学生像に適った志願者が予想以上に数多く集まった。

これからの若者たちには，新学習指導要領のもと，「自ら学び，自ら考える力」を存分に培ってもらいたい。それを正当に評価し，意欲ある学生を育てることができるかどうかが，大学の将来を左右することにもなるだろう。

［表2］

学類・専門学群	募集人員	出願者数	1次合格	最終合格	合格者内訳
［第Ⅰ期］					（4月入学）
自然	5	40	13	6	普通科3、理数科1、大検1、他大学1
社会工	1	12	6	1	商業科1
情報	4	16	10	4	普通科3、理数科1
工学システム	20	78	36	20	普通科12、工業科1、理数科1、他学科3、既卒3
工学基礎	7	11	11	3	普通科1、既卒2
体育	8	220	30	10	普通科9、理数科1
［第Ⅱ期］					（8月入学）
国際総合	8	22	12	8	既卒7、社会人1
工学システム	若干名	7	3	1	既卒1